

氏名	朴 炫貞 (パク ヒョンジョン)
学位の種類	博士(造形)
学位記番号	博第16号
学位授与日	平成25年3月19日
学位授与の要件	学位規則第3条第1項第3号該当
論文題目	対話のメディアとしての映像
審査委員	主査 武蔵野美術大学 教授 板屋 緑 副査 武蔵野美術大学 教授 高橋 陽一 副査 武蔵野美術大学 教授 篠原 規行 副査 武蔵野美術大学 准教授 荒川 歩 副査 武蔵野美術大学 名誉教授 及部 克人

内容の要旨

本論文は、現代社会において映像が対話のメディアとしての可能性に対する考察である。映像は写真の発明から考えると約200年の間、絵画や彫刻など他の芸術領域に比べると格段に短い歴史の間飛躍的發展を繰り返してきた。映像の役割に芸術表現の要素が入ったことも、その発展における大きな変化として挙げられる。

まず第1部では、映像やメディア、対話というそれぞれの言葉のもつ意味を改めて定義することから、その流れや役割、可能性を探ることを目指した。第1章では映像という言葉をめぐる考察を行い、辞典の変遷や映像の領域で語られてきた定義、雑誌『美術手帳』からみる映像という言葉の使い方を探った。その結果、映像は「光によって映し出される像」の意味で定義でき、写真や映画、テレビ、アニメーション、動画などを含むかなり広い意味として用いられてきたことが分かった。続く第2章では、対話の定義を行い、対話においてメディアとはどのようなものがあるかに対する考察、鑑賞における対話と制作における対話の違いについて述べる。対話とは、「主体が媒体を通して客体と影響しあうこと」をさすと定義し、特に影響しあうことは時間や空間が異なる場合もあることから、連続性・長期的対話の形を提示できるとみた。その中媒体というメディアは、言語と言語以外のものになる場合それぞれどのような差異があるかを探り、言語以外のものとしてイメージに焦点をおいて分析した。イメージは見えるものと見えないもの両方をさす言葉であることから、内言と外言の相互的働きが特徴である対話において、イメージの連続である映像の可能性を導くことができた。映像は、マスコミをさすメディア全体を指す場合もあるが、本稿では表現領域としての映像に重点をおいた。そのような映像を用いた対話は、鑑賞における対話と制作における対話という二つの分類ができ、積極的鑑賞における対話の流れ

としてメディアリテラシーの流れを、制作における対話の特徴としてつくることと考えることとのつながりを分析した。

これらの定義をふまえ、第2部では実際に映像制作のプロセスが対話としてみられる実例をあげて分析した。まず、日本の武蔵野美術大学造形学部映像学科に開設されている授業「イメージフェノメナン I・II」の2006年から2010年までの流れを検討し、特に2010年の授業からみられる特徴をとりあげた。イメージフェノメナンの特徴は、一つ目に教員との深い関わりをもって映像制作過程を共有すること、二つ目に身近な日常をカメラを通して撮影した実写素材から表現の素材を発見する新しい映像制作方法が身に付くこと、三つ目にストーリーがなくてもストーリー性でつくられる映像を試みることという三つで整理した。映像現象と訳されるイメージフェノメナンは、映像にしかみられない独自の現象に注目し表現することを目指していて、そのことからモノやコトに対する新たな視点への発見ができることから、映像作品制作のみならず発想法としても用いられることが確かめられた。他方、イギリスでは2003年ニッキ・ハムリンによる「フィルムアートフェノメナ」が提示された。ナラティブに頼らない映像作品の流れを提示したフィルムアートフェノメナとイメージフェノメナンとの比較を通して、新たな映像表現の要素としてメディア、装置、美学からの特徴が確認できた。専門領域であったフィルムアートフェノメナとの比較に続き、幼児教育の新たな試みであるイタリアのレッジョ・エミリアの分析を行った。その分析を通して、光の要素や変化の仕組みを含む広い意味としての映像の使い方による教育現場での対話の在り方を探り、各場面で影響しあう手がかりがあること、見つけることやつくることが生み出す対話の可能性を確認した。

第3部では、映像をつくることによる対話は、自己の作品や自主企画のワークショップ実践からでもみられる。まずは筆者自身による映像制作方法論を提示し、カメラでしかみられない日常の表現、映像の中でしかない時空間づくりによる境界の表現、なつかしさへの表現という三つの特徴を明らかにした。その特徴に基づいて制作し発表した作品4つを実例として挙げ、「GATE」では日常に新たなリズム感を与えることから、「So Far, So Near」では見慣れていたモノやコトから新たな価値を発見すること、「Sillage」では移動やスクリーンとスクリーンの鑑賞に対する表現、「雨」からは言葉とイメージ、国と国、展示と展示の間関係を考察した。これらの実践からは、様々な側面から対話の形がみられた。個人の制作にとどまらず、より広く映像をつくる経験を通した対話の場を設けるため企画・実施したワークショップの実例に対する分析に続いた。企画にあたって影響される要素や背景の分析に続き、子どもの森に対する映像制作ワークショップ「SOUP project」や子どもの写真ワークショップ「SHUN Project」をめぐる考察を行った。

現代社会において変化を繰り返している映像メディアを用いた表現はますます広がっている。その現状は映像に対して受け手からつくり手への対話の変化をもたらし、様々な映像表現を可能にした。映像をつくることは、様々なモノやコトを通した対話の過程であり、映像をつくるプロセスにおける思考や発見に注目し、今だからできる映像による対話

を提示した。

審査結果の要旨

1. 講評概要

審査委員会は朴炫貞（造形研究科博士後期課程造形芸術専攻環境形成研究領域在学）から提出された博士論文『対話のメディアとしての映像』について審査を行い、博士（造形）の学位を授与するにふさわしいとの結論に至った。

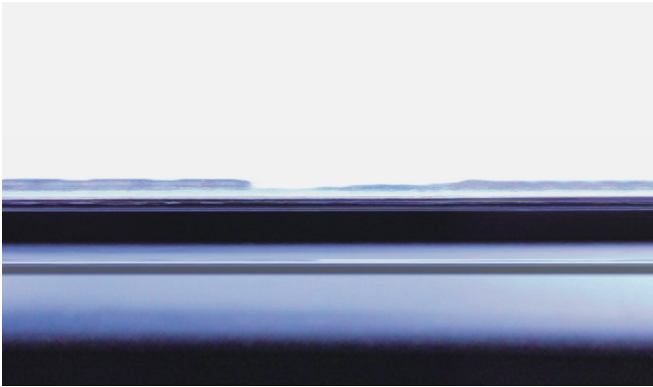
審査にあたっては、本論文を検討し、2013年2月23日に公聴会を実施し、次いで審査委員会が本人に口述試験を行い、環境形成研究領域における論文と作品の双方において博士（造形）の学位に値すると確認された。

2. 本論文および制作の評価について

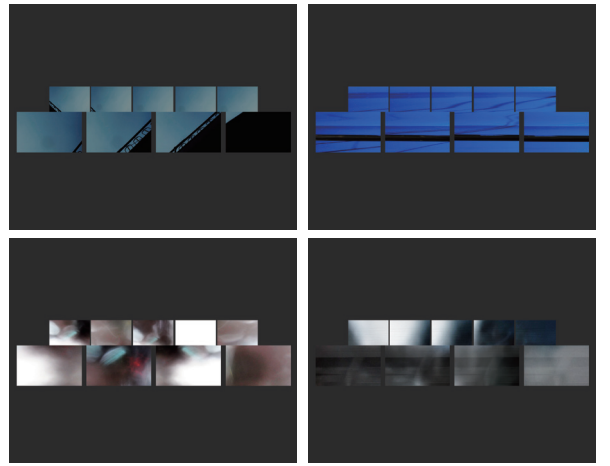
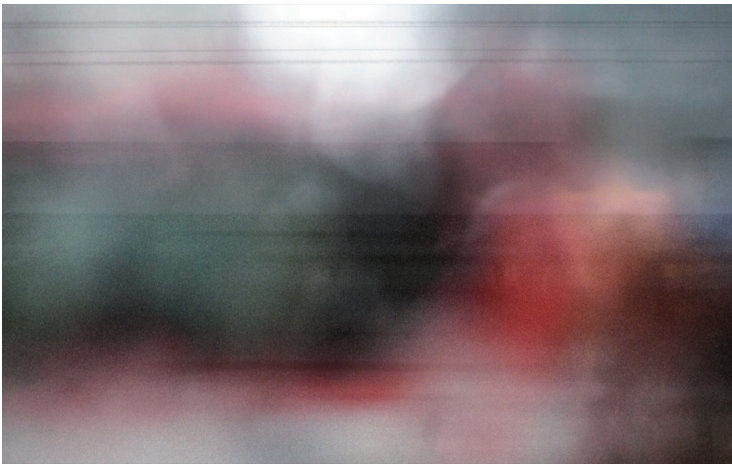
本学博士後期課程「環境形成研究領域」の研究は論文と制作からなるものである。まず本論文の審査にあたっては、予備論文審査における最重要指摘事項であった「対話」という言葉を分析指標として定義することについて、本論文の構成を変え、第1部の第2章を加筆することで対応していることが確認された。更に、加筆された箇所として、本論文の第1部・第3章・第2節「映像におけるノイズに対する考察」は、映像の特質から対話のあり方を導き出しており、それは独自の知見であるとともに、つづく第2部のイメージフェノメナンとレヅジョ・エミリア、第3部の自作と自身が企画した映像ワークショップを有機的に分析するための指標を与えたと評価された。また、第1部・第3章「映像の特徴からみる対話の可能性」によって、美術教育の中の造形ワークショップという括りの中で、映像ワークショップを意義あるものとして位置付けることができた、という評価が寄せられた。映像や通信機器の発達により様々なコミュニケーションツールが生まれ、その方法も過剰なまでに溢れているながらも、コミュニケーションの不在といわれる現代社会において、対話を「主体が媒介を通して客体と影響し合うこと」と定義し、そのメディアとして、外言から内言へ向う対話の特性をもった映像が有用であることを、自身の制作とワークショップにおいて検証し、映像を用いた対話を新たな形として提示し、その可能性を示したことは高く評価したいと考える。

次に制作の審査にあたっては、事前に自身の制作と映像ワークショップの資料がディスクとして論文とともに提出され、その一部が公聴会においても上映され、説明と質疑応答が行なわれた。論文の論拠が制作することやワークショップの企画を通して導き出されていることと同時に、制作の理論的背景が論文を拠る所にしており、論文と制作が分かち難く、関係していることが確認された。特に映像作品「So Far, So Near」においては、本学の7号館の窓枠が撮影素材として使用されているが、通常は、ノイズとして扱われるコーキングの表面に積った埃までも遠景の山並みに見立てて作品を構成している。また、そこ

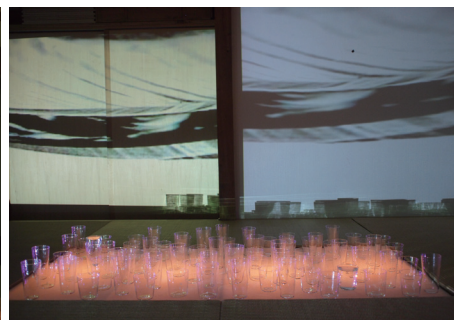
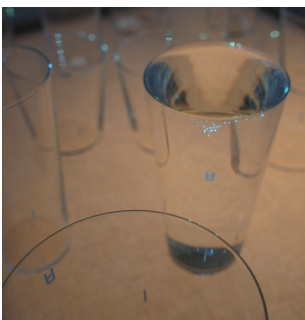
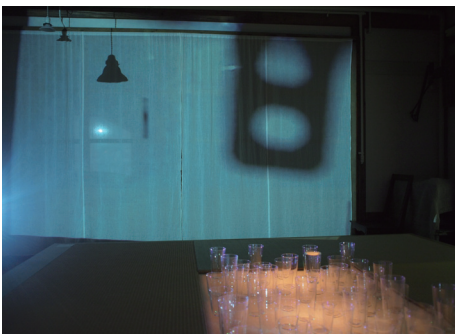
に窓を引いたり、突出したりする現実の時間と、窓枠のラインの操作によって造り出された風景の中に過去の時間を設定している。この制作のプロセスそのものが、映像特有の「対話」のあり方で、鑑賞する側は還元的にはじまりの「対話」に触れることになる。見立てという対話によって造られた庭のように映像作品を制作することは、独自性があり、高く評価したい。



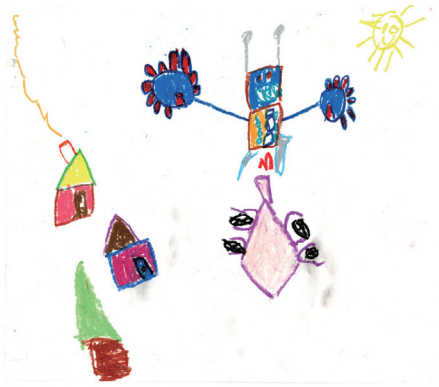
1 「So Far, So Near」
2009 | W100cm x H200cm x D60cm | 映像インスタレーション | 4分20秒



2 「Sillage」
2011 | W10m x H 10m x D 20m | 9 screen 映像インスタレーション | 3分18秒



3 「雨：日」
2012 | W10m x H2m x D3m | 映像インスタレーション | 7分 | 大野あかりとの共同制作



4 「SOUP Project」
2009～、森をテーマにした子ども対象の映像制作ワークショップ



5 「シュン・プロジェクト」
2012～、東北の子ども対象のインスタントカメラを用いたワークショップ、www.shun-project.jp 参照
(子どもたちがテーマにそって撮影した写真)